



アンサンブル ディマンシュ 第96回演奏会

2025年3月15日(土)
調布市グリーンホール 大ホール

ご挨拶

本日はお忙しい中、ご来場いただき誠にありがとうございます。

過去95回を数える当団の定期演奏会の中で、ベートーヴェンの交響曲を第1番から順番に演奏していく「ベートーヴェン・チクルス」を3回やっています。しかしながら、いずれも第8番まで到達した段階で中断しています。直近では第83回演奏会(2018.9)の第1番から第91回(2022.9)の第8番まで3回目のベートーヴェン・チクルスをやってきました。次の第92回(2023.2)で第9番(第九)に行きたかったのですが、「第九」の壁は厚く断念しました。「第九」は、何より合唱を伴うことから、合唱団との調整が必要ですが、コロナ禍で合唱団の活動が大幅に制限されていたため準備期間を設けました。ようやく準備が整い、フィルハーモニッシャー・コール(合唱団)の協力を得て、本日、第96回定期演奏会において「第九演奏会」を開催することとなりました。これで、3回目にして初めてベートーヴェンの交響曲チクルスが完結します。

当団は、通常45人前後で演奏する室内管弦楽団です。今回の第九では、多少人数は増えるものの、小規模編成ならではの強みを生かした演奏を目指したいと思っています。

山口 彰

(アンサンブル ディマンシュ団長)

【プログラム】

～「第九」初演時のプログラムから～

ベートーヴェン 「献堂式」序曲 op.124

♪休憩♪

ベートーヴェン 交響曲第9番ニ短調 op.125 「合唱付き」

【アンサンブル ディマンシュプロフィール】

当団は、学習院大学や上智大学などの学生オーケストラの現役メンバーを中心にバッハを演奏する合奏団として1976年秋に結成され、翌年1月に第1回演奏会を開催しました。1978年1月の第2回演奏会では小編成の管弦楽団として再編成され、それ以降、年2回の定期演奏会を重ねてきました。48年間も活動を続けている「アマチュアオーケストラの老舗」です。

第1回からこれまでに約700名の方が演奏会に参加しています。初期からのメンバーも頑張っていますし、一度退団した人が戻ってきたり、若いメンバーも少しずつ増えています。

当団は、第1回演奏会から第78回演奏会まで、長きにわたり創立者であり責任者でもあった山本誠一郎氏が指揮を務めてきましたが、同氏の勇退に伴い2016年に組織が再編され、新たに平川範幸氏を指揮者に迎えて「新生ディマンシュ」として船出しました。

2020年から始まった新型コロナウイルス感染拡大の時期には、その猛威にも負けず、「演奏会場からキャンセルされない限り万全の態勢を整えて演奏会をやろう」との信念で、一度も休止することなく演奏会を開催し続けた結果、多くの賛同をいただきました。そしてそれが団の発展へと結びつき、現在への礎となりました。

「Dimanche (ディマンシュ)」はフランス語で「日曜日」のことですが、当団は「日曜日に集まって練習する合奏団」ということで「Ensemble Dimanche (アンサンブル ディマンシュ)」と名付けられました。実体は管弦楽団であるにも関わらず「アンサンブル(合奏団)」と名乗っているのは、結成時バッハを演奏する合奏団であった名残りですが、一人ひとりがソリストのような気持ちで音楽を表すという意味で、この名前を継続して使用しています。

モットーは、「楽器で会話ができるオーケストラをめざす」です。

【指揮者プロフィール】

平川 範幸
(ひらかわ のりゆき)



福岡県出身。

福岡教育大学卒業。上野学園大学研究生＜指揮専門＞にて下野竜也、大河内雅彦の各氏に師事。桐朋学園大学オープンカレッジにて、黒岩英臣、沼尻竜典の各氏に師事。音楽理論を中原達彦氏に、ピアノを田中美江氏に師事。

東京音楽大学特別講座にて、パーヴォ・ヤルヴィの指揮公開マスタークラスを受講。その模様がNHK「クラシック音楽館」にて放送される。

新日鉄住金文化財団指揮研究員として、紀尾井シンフォニエッタ東京、東京フィルハーモニー交響楽団の下で活動する。その後東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団指揮研究員として、宮本文昭、飯守泰次郎、矢崎彦太郎の各氏をはじめとする指揮者の下で研鑽を積む。

2016年、サントリーホールで開催された「こどもたちのコンサート」特別公演にて、ウィーン・フィルのメンバーと仙台ジュニアオーケストラの合同演奏を指揮する。同年、浜松フィルハーモニー管弦楽団の演奏会にて、ベルリン・フィルのオーボエ奏者、クリストフ・ハルトマンやクラリネット奏者のヴェンツェル・フックス、ホルン奏者のシュテファン・ドゥ・ルヴァル・イエジエンスキーの各氏らと共演する。

これまでに、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、大阪交響楽団、オーケストラ・アンサンブル金沢、仙台フィルハーモニー管弦楽団、千葉交響楽団、九州交響楽団、東京混声合唱団、広島ウインドオーケストラなどを指揮する。

2016年より2021年まで、仙台ジュニアオーケストラ音楽監督を務める。

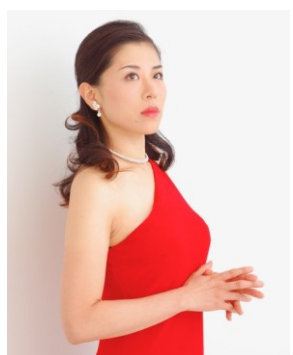
【ソリストプロフィール】

柏原 奈穂 (かしわばら なほ) ソプラノ



東京藝術大学声楽科卒業。同大学院修士課程オペラ科修了。アカンサス音楽賞受賞。藝大同声会新人演奏会に出演。二期会オペラ研修所プロフェッショナルコース第6期修了。日本声楽家協会研究員ディプロマ修了。2006年秋より文化庁海外派遣在外研修員としてイタリアへ1年間留学。F. モルラッキ国立音楽院(ペルージャ)を称賛付き最高点の成績で修了。オペラでは「フィガロの結婚」(スザンナ)、「後宮よりの逃走」(コンスタンツェ)、「ドン・ジョヴァンニ」(ツェルリーナ)、など多数出演。また、「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」、「第九」、「メサイア」、オルフ「カルミナ・ブラーナ」、モーツァルト「レクイエム」等のソプラノソロを務める。バッハ・コレギウム・ジャパンの国内、海外公演に参加し、ヘンデル「ユダス・マカベウス」ではソプラノソロ(イスラエルの女)を務めた。妹、柏原美緒とのジョイントコンサートを2005年から企画し、地元の柏を始め、東京、福岡、奄美大島等で公演をし、文化振興に大きく貢献している。第11回世界オペラ歌唱コンクール「新しい声2005」のアジア予選で優秀者として選ばれ、ドイツでの本選に出場。聖徳大学音楽学部准教授。日本声楽家協会研究所および教育センター講師。二期会会員。日本声楽アカデミー会員。

向野 由美子 (こうの ゆみこ) アルト



東京芸術大学音楽学部声楽科卒業、同大学大学院修士課程修了。在学中より、宗教曲のソリストとして活躍。バッハ「ヨハネ受難曲」「マタイ受難曲」、マーラー「復活」「大地の歌」、モーツァルト・ヴェルディ・スッペ・デュルフレ「レクイエム」他、多数のバッハカンタータソリストを務める。オペラでは「コジ・ファン・トゥッテ」ドラベッラ・デスピーナ、「ナブッコ」フェネーナ、「カルメン」カルメン等演じる。2005年「ラ・チェネレントラ」ティスベ役で藤原歌劇団デビュー後、翌年同歌劇団公演「蝶々夫人」スズキ役を演じて好評を博し、その後も同歌劇団公演の出演を続けている。ズボン役を得意とし、「カプレーティとモンテッキ」ロメオ、「ヘンゼルとグレーテル」ヘンゼル、藤原歌劇団公演「フィガロの結婚」ケルビーノ、「オリィ伯爵」イゾリエ・「ファウスト」シーベルにて好評を博した。また、日生劇場公演 オペラ「アイナダマール」にて、スペインの詩人「ガルシア・ロルカ」を演じた。共立女子中学高等学校・都留文科大学非常勤講師、藤原歌劇団団員。

高橋 淳 (たかはし じゅん) テノール



東京音楽大学卒業、同大学院修了。1995年モーツァルトウム音楽院夏期アカデミー修了。二期会オペラスタジオ第43期マスタークラスを優秀賞にて修了。オペラでは新国立劇場、二期会、びわ湖ホール、日生劇場をはじめ多数の国内外の公演に出演している。とりわけP. コンヴィチュニー、宮本亜門他演劇界出身の演出家の下でその才能を開花している。2024年にはびわ湖ホール「ばらの騎士」、兵庫芸文「蝶々夫人」にそれぞれ出演し、存在感のある演唱で好評を得た。またコンサートでは、N響、読売日響他全国のオーケストラとの共演を重ねており、ベートーヴェン「第九」をはじめ、バロックから現代に至るまで、幅広いレパートリーを歌っている。特に2006年8月には、ザルツブルク音楽祭ほかにおいて、ヘンツェ「午後の曳航」(演奏会形式)登役を歌い、成功をおさめた。さらには、合唱指揮およびヴォイストレーナーとして、今回共演のPHCをはじめ全国各地で指導を行い、大きな成果を上げている。東京音楽大学講師、埼玉県立大宮光陵高等学校音楽科講師、二期会愛好家クラス講師、二期会会員。

大沼 徹 (おおぬま とおる) バリトン



東海大学教養学部芸術学科卒、同大学院在学中、フンボルト大学で学ぶ。二期会オペラ研修所第51期修了(最優秀賞)。第14回日本モーツァルト音楽コンクール声楽部門第1位。第21回五島記念文化賞オペラ部門新人賞を受賞し、ドイツ・マイセンに留学。二期会ニューウェーブ・オペラ劇場『ウリッセの帰還』題名役で二期会デビュー。これまでの主な出演は新国立劇場『沈黙』ヴァリニアーノ、『愛の妙薬』ベルコーレ、『紫苑物語』平太、同音楽教室『蝶々夫人』シャープレス、日生劇場『コジ・ファン・トゥッテ』ドン・アルフォンソ、『ランメルモールのルチア』エンリーコ、『マクベス』題名役、藤沢市民オペラ『トスカ』スカルピア等があり、東京二期会でも『オテロ』イアーゴ、『サロメ』ヨカナン、『タンホイザー』ヴォルフラム、『ローエングリン』テルラムント、『フィガロの結婚』伯爵、『魔笛』パパゲーノ等バリトンの主要な役を数多く演じる。コンサートでは『第九』『ドイツ・レクイエム』『カルミナ・ブラーナ』や、『マタイ受難曲』『メサイア』のソリストを務めるほか、ドイツリート、特にシューベルトの三大歌曲集の演奏・解釈に定評がある。国立音楽大学非常勤講師。日本演奏連盟、二期会会員

【合唱指揮】

奥村 泰憲
(おくむら やすのり)



広島少年合唱隊出身。エリザベト音楽大学宗教音楽学科卒業、同大学院修了。その後ユーゴスラヴィアモクラニャツ音楽院ならびにルーマニア国立ヤシ歌劇場に短期留学。2005 年よりウィーン国立音楽大学(声楽)、プライナー音楽院(指揮・オペラ)で研鑽を積む。2006 年ウィーンでシュッツ「マタイ受難曲」イエス役で ソリストデビュー、また同地でグルック「トーリードのイフェジェニー」トアス王を歌いオペラデビュー。声楽家(バリトン、アルト)として「クリスマスオラトリオ」「マタイ受難曲」「メサイア」「天地創造」「第九」「カルミナブラーナ」などの多数ソリストを務める。オペラではアルトとして「ジュリアス・シーザー」「ポント王ミトリダーテ」、バリトンとして「魔笛」「ラ・ボエム」「道化師」など 50 役を演じた。指揮者として 2009 年にシュッツ「十字架上の七つの言葉」、バッハ「ミサト長調」を指揮しデビュー。2012 年帰国後はオーストリアの宗教作品をレパートリーの中心とし、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト の作品に積極的に取り組んでいる。また歌劇「フィガロの結婚」「魔笛」「ドン・カルロ」「ヘンゼルとグレーテル」「蝶々夫人」を指揮する。現在フィルハーモニッシャー・コール他13団体の指導を務める。東京大学音楽部講師。

【合唱団プロフィール】

フィルハーモニッシャー・コール(Philharmonischer Chor:略称PHC)は、「音楽を愛する人の合唱団」を意味します。前身は音楽に携わる企業であるパイオニア株式会社をバックグラウンドとした「パイオニア合唱団」で、1995年から20年にわたって充実した演奏活動を行った後、2015年にその伝統を引き継いで自主運営の社会人合唱団となりました。オーケストラと共演する演奏会を活動の中心とし、プロのオペラ歌手による本格的な発声指導を受けて技術の向上に努め、合唱の楽しみを通じて団員同士の親睦を深めています。

コロナ禍によって2020年3月からの3ヶ月間すべての練習を休止しましたが、それ以降はオンライン練習も取り入れ、なんとか活動を継続することができました。これまでの主催演奏会では、ラター「マニフィカト」、モーツァルト「戴冠ミサ」、プッチーニ「4声のミサ曲」、バッハ「ミサ曲口短調」、ブラームス「ネーニエ」、ドブログス「ミサ」、パルメリ「ブエノスアイレスのミサ」など幅広い作曲家の作品を取り上げました。現在は7月の第7回演奏会に向けて、ヴィヴァルディ「グローリア」、メンデルスゾーン「詩篇42」などに取り組んでいます。

今回の共演は、「パイオニア交響楽団」にも所属されている山口団長からのお声かけで実現しました。60名という人数は、第九を歌うにはやや心もとないのですが、合唱指揮の奥村先生、ソリストとして出演してくださる先生方と精度の高い演奏を目指して練習を重ねてまいりました。本日の演奏をお楽しみいただければ幸いです。

♪ 合唱団メンバー ♪

ソプラノ	会田紀子	石田玲子	上原弓子	大音絵莉	加門千明	後藤裕美	齋藤 泉
	菅原節子	鈴木美恵子	高井淳子	立石陽子	難波史子	古瀬恵美子	増澤佳子
	山川眞美子						
アルト	安藤慶子	池永肇恵	植松美帆	浦口あや	小池まり子	小島恵子	清水節子
	鈴木結花	高橋瑞稀	高林睦美	田中靖子	辻 富子	永井由里子	長嶋真理子
	中道尚子	西川敦子	山田真理子	吉武朋子			
テノール	安藤秀則	大川耕史	大隈雄介	加藤政義	鎌倉米康	河村 進	菅野陽一
	黒田 修	佐藤 洋	佐藤元哉	遠田昭夫	田中良憲	林 康秀	
バス	稲垣良吾	小倉信一	亀長史郎	加門洋一	狩野嘉昭	九後 悠	小池慎一
	鈴木啓祐	田中 剛	中島直生	成石康成	元吉健二	山岡亮雄	山田健悟
	山田浩史						

【曲目紹介】

◆ベートーヴェン:「献堂式」序曲Op.124

「献堂式」は、1822年にウィーンのヨーゼフシュタット劇場のこけら落としで演じられた祝典劇で、ベートーヴェン(1770-1827)はこのために劇付随音楽を作曲しています。この序曲と第1曲の合唱曲以外は自身の「アテネの廃墟」を手直したものです。今日では劇音楽全体が演奏されることはほとんどありませんが、この序曲は単独で演奏されることがあります。ちなみに「献堂式」とは「キリスト教において新築の会堂を神に捧げる儀式」のことで、一般にいう「竣工式」のようなものでしょうか。

この曲は、「第九」が1824年5月7日にウィーンで初演されたときの演奏会の前プロとして演奏されています。「第九」の作品番号が125番なので、作品番号上は「第九」の一つ前に当たります。

曲は、88小節にも及ぶゆったりとした序奏と速い主部からなっています。序奏は行進曲風に始まりますが、途中でテンポが2回変わるので、全体は3つの部分に分けられます。ラッパのファンファーレが出てきたり、当時ウィーンで大流行していたロッシーニの歌劇の序曲風な部分など多彩な序奏となっています。主部は、無窮動の速い二重フーガで始まります。「第九」の第4楽章のコーダに似たモチーフも出てきます。

◆ベートーヴェン:交響曲第9番ニ短調Op.125「合唱付き」

第1章:「第九」の誕生

ベートーヴェンは、1817年、ロンドン在住でかつてベートーヴェンの弟子であったフェルディナント・リースからロンドン訪問を持ちかけられます。リースはロンドン・フィルハーモニー協会の協力者でした。ベートーヴェンは3曲の序曲を準備してロンドン訪問を計画しますが、結局、体調不良などの理由でロンドン訪問は実現しませんでした。その後、1822年に同協会から2曲の交響曲を委嘱されます。その頃ベートーヴェンが構想していたのが、第9番と第10番になる予定の交響曲で、ベートーヴェンは同年から本格的に第9番の作曲を開始します。この協会からの委嘱が、「第九」誕生のきっかけになったとも言えます。第9番は1824年に完成しますが、残念ながら第10番はスケッチのみに終わっています。2曲完成していたら、「第九」はロンドンで初演され、「ロンドン交響曲」と呼ばれていたかもしれません。

実は、ベートーヴェンには、1793年頃(22歳頃)にもロンドン訪問の話がありました。ベートーヴェンの師匠であるハイドンは、1791~92年と1794年~95年に2回ロンドンを訪れていますが、当時のベルリン音楽新聞の記事によると、「ハイドンは2回目のロンドン訪問に門下のベートーヴェンを帯同しようとしたが、それは実現しなかった。」とあります。この頃、ベートーヴェンにはハ短調とハ長調の2つの交響曲の構想があったようです。この2曲はスケッチで終わっていますが、ロンドン訪問が実現していたら、この未完の交響曲を完成させて持って行ったことでしょう。この2曲が完成していれば、「第九」は11番目の交響曲となり、「第九」とは呼ばれてなかったかもしれませんね。ちなみに、ハイドンは2回のロンドン訪問で合計12曲の交響曲(ロンドン交響曲)を作曲し、相当な収入を得て帰国したと言われていますが、この時ベートーヴェンのロンドン訪問が実現していたら、貧乏生活から抜け出して、作風が変わっていたかもしれません。

第2章:「第九」の初演

結局「第九」は、1824年5月7日にウィーンで初演されることになります。このときのプログラムは、「第九」のほか、前述の「献堂式」序曲Op.124とミサ・ソレムニスOp.123(抜粋)でした。2024年はちょうど200周年に当たります。また、「第九」が日本で全楽章公式に初演されたのが、1924(大正13)年11月29日、東京音楽学校(東京芸術大学音楽学部的前身)の定期演奏会だと言われています。前年に起きた関東大震災の復興を願う意味もあったのかもしれません。2024年はその100周年でもあります。余談ですが、この1924年11月29日は、歌劇「蝶々夫人」で有名なイタリアのオペラ作曲家・プッチーニの命日でもあります。

第3章:「第九」の特徴

「第九」の最大の特徴は、何とんでも「合唱」が入った「前人未踏の交響曲」であるということでしょう。それまでの交響曲は管弦楽のみで演奏される曲で、逆に言う合唱が入ったものは「交響曲」とは呼べなかったのですが、ベートーヴェンは、そこにドイツの詩人・シラーの「An die Freude(歓喜に寄せて)」という詩をテキストとして、独唱と混声合唱を導入したカンタータ風な楽章を取り入れ、風穴を開けたのです。

「第九」には、ほかにもいろいろ特徴があります。①1時間を超える長大な交響曲であること、②本来緩徐楽章である第2楽章とスケルツォ(メヌエット)の第3楽章が入れ替わっていること、オーケストラに③「鳴り物」と呼ばれるティンパニ以外の打楽器のほか、④トロンボーン、ピッコロ、コントラファゴットなどの特殊な管楽器が使われていることなど、挙げれば切りがありません。このうち、①については、自身の持つ「英雄」の約50分という記録を抜いて、約75分という新記録を樹立しました。②と③については、ベートーヴェンの他の交響曲には見られない特徴ですが、ハイドンの交響曲に見られるので、ベートーヴェンが始めたとは言い難いです。また、④については、「第九」が初めてではなく、自身の交響曲第5番「運命」において初めて交響曲に使用された楽器です。(注:ピッコロはベートーヴェン以前に、ヴラニツキーの交響曲ハ長調op.31「平和」(1797)で使われています。)

第4章:「第九」の原型

「第九」の第4楽章が独立した曲であれば「カンタータ」に分類されたでしょう。あまり知られていませんが、ベートーヴェンはカンタータを11曲残したと言われています。カンタータは、器楽又は管弦楽を伴う声楽曲で、オペラ、オラトリオ、受難曲などのジャンルに属さない曲を言います。管弦楽の序奏やレチタティーヴォ、アリア、コーラルなど声楽曲の組曲になっており、オラトリオと区別し難いですが、オラトリオが宗教的な歌詞を伴い、長編でドラマ性があるのに対し、カンタータは宗教的な歌詞のほか、世俗的な歌詞のものも含まれ、短編で内容も様々です。ベートーヴェンが1808年に書いた「ピアノ、合唱と管弦楽のための幻想曲Op.80」、通称「合唱幻想曲」も、分類上はカンタータに数えられます。この曲は「第九」の第4楽章の基になっていると言われており、その主旋律は「歓喜の歌」に似ています。

また、「歓喜の歌」は、モーツァルトの聖節の奉獻歌「主の御憐みを(Misericordias Domini)」K222(205a)が基になっているとも言われています。この曲の弦楽の伴奏には、調性や拍子は違いますが、「歓喜の歌」の最初の4小節にそっくりなモチーフが繰り返し出てきます。この曲が作られたのは1775年ですが、出版されたのは1811年で、ベートーヴェンが交響曲第7番を書いていた頃です。ただし、ベートーヴェンがこの曲を知っていたかどうかは、定かではありません。

第1楽章 *Allegro ma non troppo, un poco maestoso* ニ短調 2/4拍子

A(ラ)とE(ミ)の5度の和音の上に、この2音をなぞるように鋭く下降するモチーフで始まります。15小節目でファゴットとホルンがD(レ)に変わるのを合図に♯でニ短調の第一主題が登場します。冒頭から14小節目間は、全パートがEとAしか演奏していない珍しい部分で、長調なのか、短調なのか分からない不安感を醸しています。第二主題は変ロ長調に変わりますが、この主題は第4楽章の「歓喜の歌」のテーマを暗示しているという説もあります。

第2楽章 *Molto vivace* ニ短調 3/4拍子 -*Presto* ニ長調 2/2拍子

標記はありませんが、スケルツォとトリオです。「ターンタタン」というオクターヴで下降する特徴的なモチーフの序奏で始まります。通常ニ短調の曲では、ティンパニはD(レ)とA(ラ)の音に合わせますが、この楽章では、短調を決定付ける第3音のF(レ・ファ・ラのファ)の音をオクターヴで合わせます。これは当時としては類がない挑戦的なことです。スケルツォのテーマは、この序奏のモチーフが発展したもので、2ndヴァイオリンから順番に演奏されるフガートになっています。

第3楽章 *Adagio molto e cantabile* 変ロ長調 4/4拍子 -*Andante moderato* ニ長調 3/4拍子

木管楽器による2度下降する音型が重なっていく2小節の序奏ののち、1stヴァイオリンによって厳かな第一主題が演奏されます。この旋律は、ベートーヴェンが書いた最も美しい曲の一つとして数えられています。第二主題は拍子とテンポが変わり、ニ長調の美しい旋律がヴィオラと2ndヴァイオリンによって奏されます。この主題はこの楽章の序奏の音型が発展したものです。この二つの主題が重なり合って、変奏曲のように進んでいきます。最後は祈るように余韻を残して終わり、第4楽章へと続きますが、緩徐楽章を第3楽章とした効果は、ここに表われています。

第4楽章 *Presto* ニ短調 3/4拍子 -*Allegro assai* ニ長調 4/4拍子

この楽章は、管弦楽による序奏部分と合唱(独唱)が入ったカンタータ風の部分に分かれています。冒頭、管楽器による叫ぶようなシンコペーションの不協和音で始まります。それを打ち消すようにチェロ・バスがレチタティーヴォ風に歌います。第1楽章、第2楽章、第3楽章の断片が順に出てきますが、レチタティーヴォはそれぞれを打ち消していきます。一段落して、有名な「歓喜の歌」の旋律がチェロ・バスによって歌われると、ヴィオラ、ヴァイオリンへと引き継がれていき最高潮に達したところで、再び全合奏で冒頭の不協和音の旋律が出てきます。今度は、バリトン独唱がレチタティーヴォ風にこれを打ち消し、「歓喜の歌」を歌い始めます。歌の後半は合唱や四重唱へと続き、カンタータ風に進んでいきます。

♪ アンサンブル ディマンシュ第96回メンバー ♪

ピッコロ	上野京子	徳植俊之				
フルート	谷口玲子	伊藤佐保子	山口高司			
オーボエ	市川亜理	瀬戸綾子	中嶋智子			
クラリネット	鈴木千暁	高橋 肇	星野未央			
ファゴット	越島康太郎	金澤恵子	友田昭博	町田明子	由川 裕	
ホルン	尾形武一	木村 晃	高井浩太郎			
トランペット	内田直大	鴨川友輔	桜田健彦			
トロンボーン	新井恵美	千秋修子	星野武徳	皆川 諭		
パーカッション	薄 貴久	三瓶政一	鈴木陽子	戸張純一	西村 実	林 俊夫
1stヴァイオリン	☆時山響子	若月洋人				
	本山まり子					
2ndヴァイオリン	♪森 未知	相羽あゆみ	石嶺寿子	中村文樹	松前 巖	宮本 敦
	森上由紀	油谷伸一				
ヴィオラ	♪関口孝司郎	柴野かおり	下山純也	中島詩歩	山口 彰	吉村幹子
チェロ	♪植田圭司	緒方 淳	永田隆司	中山憲一	藤村ゆ香	三次摂子
コントラバス	♪須賀敬亮	江川博之	高橋 純			

(☆コンサートマスター ♪弦楽器トップ)

トレーナー	戸澤哲夫	(東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団コンサートマスター)
パート指導	高岸卓人	(東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団ヴァイオリン奏者)
パート指導	臼木麻弥	(東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団首席ヴィオラ奏者)
パート指導	香月圭佑	(東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団チェロ フォアシュペーラー兼首席代行)
パート指導	山崎 実	(東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団首席コントラバス奏者)
パート指導	本多啓佑	(東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団首席オーボエ奏者)
パート指導	石井野乃香	(東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団副首席ファゴット奏者)
パート指導	小林祐治	(東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団ホルン奏者)

練習指揮 山上孝秋

♪ 次回の演奏会ご案内 ♪

日時：2025年9月21日(日)
場所：調布市文化会館たづくり くすのきホール
指揮：平川 範幸
曲目：未定



詳細はHP <http://www.e-dimanche.jp/> をご覧ください。
※招待券をご希望の方は、アンケートにご記入ください。

◆「歓喜の歌」対訳表

O Freunde, nicht diese Töne!
Sondern laßt uns angenehmere
anstimmen und freudenvollere.

Freude, schöner Götterfunken,
Tochter aus Elysium
Wir betreten feuertrunken.
Himmlische, dein Heiligtum!

Deine Zauber binden wieder,
Was die Mode streng geteilt;
Alle Menschen werden Brüder,
Wo dein sanfter Flügel weilt.

Wem der große Wurf gelungen,
Eines Freundes Freund zu sein,
Wer ein holdes Weib errungen,
Mische seinen Jubel ein!

Ja, wer auch nur eine Seele
Sein nennt auf dem Erdenrund!
Und wer's nie gekonnt, der stehle
Weinend sich aus diesem Bund!

Freude trinken alle Wesen
An den Brüsten der Natur;
Alle Guten, alle Bösen
Folgen ihrer Rosenspur.

Küsse gab sie uns und Reben,
Einen Freund, geprüft im Tod;
Wollust ward dem Wurm gegeben,
Und der Cherub steht vor Gott.

Froh, wie seine Sonnen fliegen
Durch des Himmels prächt'gen Plan,
Laufet, Brüder, eure Bahn,
Freudig, wie ein Held zum Siegen.

Seid umschlungen, Millionen!
Diesen Kuß der ganzen Welt!
Brüder, über'm Sternenzelt
Muß ein lieber Vater wohnen.

Ihr stürzt nieder, Millionen?
Ahnest du den Schöpfer, Welt?
Such' ihn über'm Sternenzelt!
Über Sternen muß er wohnen.

〔バリトン独唱〕 216小節
おお友よ、このような旋律ではない！
もっと心地よいものを歌おうではないか
もっと喜びに満ち溢れるものを

〔バリトン独唱・合唱〕 237小節
歓喜よ、神々の麗しき靈感よ
天上楽園の乙女よ
我々は火のように酔いしれて
崇高なる者(歓喜)よ、汝の聖所に入る

汝が魔力は再び結び合わせる
時流が強く切り離れたものを
すべての人々は兄弟となる
汝の柔らかな翼が留まる所で

〔四重唱・合唱〕 269小節
ひとりの友の友となるという
大きな成功を勝ち取った者
心優しき妻を得た者は
自身の歓喜の声を合わせよ

そうだ、地球上にただ一人だけでも
心を分かち合う魂があると言える者も歓呼せよ
そしてそれがどうしてもできなかった者は
この輪から泣く泣く立ち去るがよい

すべての存在は
自然の乳房から歓喜を飲み
すべての善人もすべての悪人も
自然がつけた薔薇の路をたどる

自然は口づけと葡萄の木と
死の試練を受けた友を与えてくれた
快楽は虫けらのような者にも与えられ
智天使ケルビムは神の前に立つ

〔テナー独唱・男声合唱〕 375小節
天の壮麗な配置の中を
星々が駆け巡るように楽しげに
兄弟よ、自らの道を進め
英雄が勝利を目指すように喜ばしく

〔合唱〕 543小節 歌詞繰り返し

〔合唱〕 595小節
抱き合おう、諸人(もろびと)よ！
この口づけを全世界に！
兄弟よ、この星空の上に
聖なる父が住みたもうはず

ひざまずくか、諸人よ？
創造主を感じるか、世界中の者どもよ
星空の上に神を求めよ
星の彼方に必ず神は住みたもう

〔合唱・四重唱〕 654小節 以下、歌詞繰り返し